

奨励賞の「タニシの楽しみ」は、タニシの視点から語られている物語です。

ファーストシーンは夏休み明けの教室。水槽の中のタニシの「俺」は、待ちわびています。このタニシには、ある条件に適った人間と入れ替わることができる時期があり、今年もそろそろ、「その日」がやってくるのでした。タニシが抱いている期待感。いざ入れ替わるときの臨場感。それらが生き活きと描かれていて、惹きつけられました。

さて、ひとりの女生徒になったタニシは、いつもの彼女のキャラとは違った感じの行動を起こし、そのことによって、周囲の彼女を見る目も変わっていきます。

人と人、または人間と人間ではないものが入れ替わるという話はいままでにもたくさんありますが、この作品は、入れ替わる時間が、一年に一回、二十四時間だけ、という縛りが、短編としてまとめるのにちょうどよい設定だと思いました。

ただ、入れ替わったため中身はタニシの状態なのに、女の子の意識が残っているような表現があったり、また、タニシがタニシにもどるときの状況と場所がわかりにくいなど、細かなツッコミどころや、物語の運び方に不自然なところが幾つかあるのが、気にはなります。

しかし、全編にただようユーモアと、いい塩梅のゆるさになごまされ、読んでいるうちに、こちらも楽しくなってしまう、そんな心地よさがある作品でした。

入れ替わりをきっかけとしての女の子の学校生活の変化もほほえましい展開ですし、最後、他の生き物と男の子の名をうまく使ったオチも、しゃれていてよかったです。

佳作の「限られた選択肢」は、六月のスクランブル交差点が舞台背景です。

「タニシの楽しみ」はタニシの擬人化でしたが、こちらは、風船が擬人化されています。

一人の女性によって売られている風船達。物語は、その風船の一つである「僕」の一人称で描かれていきます。彼らは、自分の意志ではどうにもできません。買っていく人によって分かれる、それぞれの運命。人間のミスであやまって放たれ、「自由になれた！」と歓喜する風船もいます。しかし、空の上で風船を待ち受けていた無惨な結果とは……。

「僕」の、自身や他者の風船人生を見つめる目が確かであり、また、「書きすぎでない」よさがある作品でした。ただ、野暮になりがちな説明過剰を避けているのはいいのですが、それにひきずられたためか、いささか描写不足になっていて、情景や人物像が伝わりにくい点が気になりました。過不足ない作品を仕上げるのは難しいことですが、書き終えたあと「読者の立場」になり推敲する時間をしっかりとることで、よりわかりやすい作品になることでしょう。とはいえ、中学一年生で、ここまで描けるのは立派です。冒頭の「アツすぎる」とラストの「サムすぎる」という言葉には、気温だけでなく、風船を売る人物や、その周りの状況も重ねているのだろうなという含みと奥ゆきを感じました。あと少しだけ、描写をプラスすることを心がけましょう。

今回、中学生の方達の頑張りが目立ちました。創作は文章力、描写力、想像力を高めることに直結します。高校生の方達もぜひ、楽しみながら物語づくりに取り組んでみてください。